

幼児造形活動における「見立て」に関する一考察

重 村 幹 夫

(2017年12月27日受理)

A Consideration on “Analogy” in Infant Formation Activity

Mikio SHIGEMURA

要旨：幼児にとって「対象物」の命名は言葉による世界の差異化であり、その意味分節作用が、内面外面の全存在世界を喚起する力を持つ。そして、「見立て」の言語化によって、他者への伝達や他者からの受容が可能となり、既知のイメージを「見立て」て、組み合わせることで、新しいイメージを作ることによる創造性が育まれると考えられる。このように「見立て」は、言葉の発達や経験によるイメージの蓄積と関係があり、その重要性は明らかである。しかし、言葉が表層的、概念的なイメージ、すなわち記号化されたイメージのみで捉えられ、それからもたらされる言語的な「見立て」に終始するとすれば「新しい意味生成」としての創造行為を見出すことは出来ない。幼児にとって、五感を使った探索活動を伴う活動の中で喚起される「見立て」と「仕立て」との複合的な往還の過程で、新たに作り直されるイメージが、「新しい意味生成」としての創造行為であると考えられる。

Key words：見立て 仕立て 言葉 イメージ

1. はじめに

「見立て」は、一つの形なり、考えなりの意味を変換していくことであり、元の形とそれを「見立て」た別の形の二つの間の類似性に起因している。日本文化の中で「見立て」を考えると、日本庭園が想起される。枯山水の庭園では、白砂や石の文様などが「水の流れ」に見立てられ、庭を宇宙に見立てている。「見立て」は意味の読み替えであり、アナロジー〔analogy〕を用いた行為でもある¹⁾。

社会一般において、造形作品を鑑賞する場面においては、その「主題」すなわち、「テーマ」や「意図」、「意味」を頼りにすることが多いと考える。「この作品は、何が描かれているのか?」、「制作者は何が言いたいのか?」と言った具合である。展覧会で、多くの鑑賞者は、まずキャプションの文字、すなわち言葉に目を通す。その言葉から、自身の経験の蓄積によるイメージを引き合いに出し、目の前の作品をその言葉から想起されるイメージと比較し、「見立て」る様に鑑賞する。ところが、完全

な抽象絵画になるとそのような方法で鑑賞する事は難しくなる。そこには、具体的な形が描かれておらず、形を識別することによって、自身の経験の蓄積によるイメージとの比較による「見立て」を行なうことが出来ず、その結果として、作品の「主題」を見出せないからである。それでも、鑑賞の経験が増えれば、「主題」を鑑賞者なりに感じ取り共感できる様になると考える。この様に、作品鑑賞のあり方は、「見立て」と関係が有ると考える。

筆者は、長年絵画制作を続けてきた。それらの作品は、素材や身体性により、ほぼ無意識に近い状態の偶然性から始める。行為がイメージを触発し、さらに次なる行為に至る。そして、具体的に説明できない非言語的イメージを形作っていく。その後、造形性や技法に配慮しながら、多分に意識的な行為を繰り返す。すなわち、合理的・計画的にものを操作し、作品化を模索する「仕立て」²⁾的な行為を行なう。結果として現れてきたイメージは、具象でありながら、具体的に言葉で説明できるイメージではな

い。このような筆者の作品は、発表の場で「よくわからない」とされる場面もあった。それは、上述した経験の蓄積によるイメージに頼った鑑賞によるものとする。そして、筆者の作品は、具象でありながら、具体的に言葉で説明できるイメージではないからである

ある展覧会で、審査員から次の様に言われたことがある。

「私は大賞は体質的には「気持ち悪いな」というのがあり、『これまでの大賞と違うな』と。体質的にあいう内臓のドロドロみたいなものがあると……。」

「内臓なのか？ 貝殻なのか³⁾」

具体的なイメージによる「見立て」で鑑賞しようとする、「内臓」、「貝殻」に終始してしまう。筆者は、この作品において、構図や色彩、技法等複合的な造形要素によるイメージを形作り、両義的な意味を暗示したつもりであったが、うまく共感してもらえなかったようである⁴⁾。ところが、具体的に明瞭に判別できるイメージを描くと、鑑賞者に、その戸惑いはなくなるのである（図2）。

我々の社会は、言葉の「意味」によって細かく分節化、カテゴリー化されている。そして我々は、経験の蓄積によるイメージを言語的に捕らえている。そのような社会制度の中で造形作品を鑑賞する時に、言語的イメージによる「見立て」を行い、その結果として「主題」を読み取ろうとするのは自然なことである。その場合、対象の「具体性」、「再現性」が理解のきっかけとなる。鑑賞者は、自身の経験によるイメージの蓄積を頼りに、「見立て」をして、「具体性」、「再現性」を読み取ろうとする。

しかし、上述したように、制作者としての筆者の経験では、「見立て」は、創造性の観点から何がしかの問題、限界をはらんでいると考える。したがって、創造性と「見立て」の関係について明らかにすることが重要であるとする。

本考察では、幼児造形活動における「見立て」の位置付けを示すとともに、幼児造形活動における創

造的な活動のありかたについて考察したい。

2. 幼児造形活動の一般的特徴と「見立て」

4歳以上の造形活動には、自己にわき起こるイメージや思いに沿って、何か形を試行錯誤して作る姿が多く見られる。これは目的をもった探索活動であり、「知的探索」と呼ばれる。これを「見立て」と合理的・計画的にものを操作し、作品化を模索する「仕立て」の複合的な活動であるとする場合もある。従来児童画の範囲が4～5歳以上の様に考えられていたのは、イメージの形象化、具象化が可能な年齢のためである。

一方で、特に3歳以下の造形活動では、作るとか描くとかいうよりも、何かをこわしたり、描いたものを消したり、まき散らしたりする活動が多く見られる。また、現在はスクリブルも絵画と考えられている。子どもたちにとって、このような活動は、色や形の関わり（または遊び）の中での造形のリテラシーとして大切にされるべきであるという。これは「マイナスの造形」と捉えられ、「知的探索」同様に重要な活動である。これは「触覚的探索」と呼ばれる⁵⁾。

これに対し、2歳半ごろから、言葉の発達やごっこ遊び、すなわちイメージを中心とする表現活動に変わっていくとする意見もある。そして、なぞり行動や、「見立て」行為といわれる力が発達してくるという。そして知的探索行動は言葉に置き換えられていくが、引き続き行なわれていく活動ではないかとされる⁶⁾。

この様に、2歳半～4歳以降に見られるとされる「見立て」は、言葉の発達や経験によるイメージの蓄積と関係があり、幼児の発達に極めて重要であるとされる。「見立て」の言語化は、他者への伝達、他者からの受容がある。既知のイメージを見立て、組み合わせることで、新しいイメージを作ることによる創造性が育まれると考えられる。幼児造形表現における「見立て」は、特に素材が重要な役割を担い、それ自体が多くの情報や経験を幼児に与えるものとしてみなすことが出来る⁷⁾。

齋藤は、幼児と大人の外界に対する関わりの違い

について次の様に記している⁸⁾。

「まだ語彙の少ない子どもにとっては、幼児は、見るもの、感じるものすべてが新鮮で驚きをもっている。見知らぬ『何か』に出会うことが多く、そのたびに身体を使って積極的に探索し、五感をフルに使って感じ、そのモノや世界を知っていく。そうやって新しい概念を学習し、世界を知ることは刺激的でおもしろいとされる。

……おとなになると、周りはすでに見知った「何か」ばかりであり、いったん『何か』として分類してしまえば、それ以上きちんと見ようとしない。……わたしたちは見た視覚情報をそのまま知覚して記憶するのではなく、頭のなかで記号化してしまっているからだ。」

大人の記憶は記号化されているため、「見立て」もそのようになる傾向があるという。筆者が経験上感じてきた「見立て」による創造性の問題は、この「見立て」の記号化にあるのであろう。一方で、幼児の「見立て」は、記号化された言語的「見立て」ではなく、五感を使った探索活動を伴うものである。それは、既述した、「見立て」と「仕立て」の複合的な活動であるとも考えられる。

齋藤は、画家Pablo Picasso (1881-1973) が子どもの絵の創造性にあこがれていたとして、彼の制作過程について次に様に記している⁹⁾。

「……描く過程から「子ども」を意識していたのだと感じさせるものがある。……その様子は、描線にモノのイメージを見たてながら、絵を変化させて描く子どもの姿と重なる。手を動かしながら、立ち上がりかけたイメージを何でも壊して、つくり変える。……自分のなかの既成の概念を放棄し、とらわれないように格闘しているようにも見える。」

Picassoの描画過程は、記号化された言語的「見立て」ではなく、五感を使った探索活動を伴う「見立て」であり、「見立て」と「仕立て」の複合的な

往還を示している。これは、幼児の創造過程と同じである。

3. 幼児造形表現における「新しい意味生成」

造形遊びの提唱者、西野は「見立て」について、具体的な何かだけでなく、より広い意味をもつてのぞむ必要があるとして、次の様に記している¹⁰⁾。

「……＜見立て＞という言葉の意味に、実在のモノに引き戻すという意味だけではなく、そのモノのイメージから離れて、新しい形へ進むという意味を加えなければならないことになる。……結論を言えばこれらの子どもたちの表現世界の危機的あるいは閉塞的な状況は、打開することができるはずである。しかし、それにはまず、大人たちの閉ざされた感性が開かれる必要がある。

また、これまでの「見立て」を批判して、次の様にも記している¹¹⁾。

「……その子は、はじめのうちは、大きめの木切れを手にして、それを見つめていた。おそらく『何かに似ていないだろうか』と見ていたのだろう。これはいわゆる『見立て』というものだ。このような『見立て』の行為からは、創造的な、つまり意味生成行為は期待できないが、他に手がかりがない（これも狭い感性の大人たちに追い込まれた結果である）とすれば、止むを得ないだろう。ところが、その子が手にした材料は、『見立て』には、都合のよいものではなかった。つまり、容易には見たことや見たもの（経験世界）の経験（＝イメージ）にはつながらなかったのである。……経験世界の具体物（例えば動物）のイメージにとらわれることなく、つまりそのかたち（＝イメージ）の再現にこだわることもなく、思いのままに試み、多様なイメージ（＝かたち＝意味）をつくりだすことを楽しむ大きなきっかけをつかむことになった。……次々に造形的な行為を重ねていっ

た。もちろん、その一つひとつの行為のたびに、新しいイメージ（＝意味＝かたち）をつくりだし、その営みは閉じることなく展開されたのである。……」

これは、「見立て」には創造性がないという批判であり、ある児童が、新しいイメージを創造する過程の観察である。西野の二つの引用文には「見立て」に対する解釈の矛盾が見られる。しかし、彼が言いたかったことは、創造行為には、記号化された言語的「見立て」ではなく、五感を使った探索活動を伴う「見立て」や、「新しい意味生成」が大切であるということである。

西野は、思考力を論じる際には、言葉による論理的な思考力に極端に重点が置かれ、しかも、その在りようや結果が客観的であることが求められすぎているという¹²⁾。

一方で、丸山圭三郎の言葉を引用しながら¹³⁾、幼児にとって「対象物」は、名前を持った時初めて知られ「存在」するのであり、命名は言葉による世界の差異化であり、その意味分節作用が、内面外面の全存在世界を喚起する力を持つとして、言葉の重要性を述べている。一方で、言葉が社会制度的表層レベルに見られるものだけに終始し、言語の表層で形成される「現実」だけに基礎づけられるとなれば、文化は、社会制度的因習に固定され、力動的な創造性を喪失した紋切り型の思惟、感情、行動のパターンに過ぎないことになるという。そして「意味」とは、決して言語的意味だけとは言えないとし、「意味」とは、人間という動物の「生への関与性」のことであり、森羅万象は、対象とその意味を切り離せない「意味＝現象」をもって存在しているという。

4. 保育者養成過程における造形活動と幼児造形活動

筆者は、現在保育者養成課程での造形教育を担当している。学生が制作した作品には、若者ならではの柔軟な発想の良さが感じられる。しかし、それらは、上述した社会一般の鑑賞方法と同様に、具体的な実際にあるイメージ、すなわち言語的イメージを表現する傾向が強いと考える（図3～12）。

（図3）は、各グループが新聞紙を使って、様々な動物に変身する課題を行なったときの写真である。この作品で制作したグループが意図的に入れたと思われるのが、変身した学生の顔の近くに写っている新聞からとった女性の顔の写真である。これは、制作者たちの遊び心であろう。そして、この作品写真を掲示したときの他の学生の興味は、この顔に集中した。これほどまでに、写真の顔、すなわち言語的イメージに意識が向けられているのである。それは、「本当の顔の近くに顔のイメージがあるのが面白い」という記号的な理解である。

また、様々な素材を元に「造形遊び」による造形活動を実践してきた。ここでいう「造形遊び」は材料、素材を元に、何らかのイメージを形作っていくことである。この場合「テーマ」は提示しない。それは、制作者が材料、素材を元に自ら決めていくものである。しかし、実際に制作させると、「具体的な形にしなければいけないと思った」と学生が語る場面も多い。すなわち、材料、素材を元に「見立て」をして、「具体性」、「再現性」を追及しようとするのである。具体的な形が決して問題なのではない。ただし、その「テーマ」が、記号的なイメージからもたらされるとすれば、そこに、創造性を見いだすのは難しいであろう。学生は、現代社会の表層的で紋切り型の記号化された言語による意味、イメージの洪水の中に置かれている。そのことが、「新しい意味生成」としての創造行為を難しくしている場合もあるのではないかと考えられる。

どのような制作にも、試行錯誤の過程はある程度存在する。しかしながら、最初に記号性の強い言語的な「見立て」をして、明瞭な主題を決めてしまうと、あとはその完成に向けて、試行錯誤が少なく、合理的・計画的にものを操作し、作品化を模索する作業中心の制作、すなわち「仕立て的」になる傾向が強い。この様に、記号性の強い言語的な「見立て」をすると、「見立て」と「仕立て」が固定化され、相互の往還は行なわれず、素材や材料、身体性などから触発された、試行錯誤による創造行為は少ないのではないかと考えられる。

筆者は、同様の「造形遊び」を保育現場でも実践

してきた。過去2年間に、10数回、多くは年長児を対象とした。その実践においては、記号的な言語による「見立て」だけでは、説明のつかない作品が多く見られた。以下に示す写真は、木の枝を中心とした自然素材をもとに自由に制作してもらった幼児の作品である（図13～26）。このような造形活動を行なう場合、導入において幾つか簡単な作品例を提示して、興味を喚起するが、それもすぐに壊し、幼児のイメージに影響を与えない様になっている。

これ等の中には、最初に「見立て」を明瞭に見出し、それに向けて制作を続けた作品も見られる（図13～14）。しかし、ほとんどの作品は、言語的で具体的なイメージで説明することは困難である。およそ90分の間、幼児は素材と向き合い「新しい意味生成」を生み出そうと試行錯誤を続けている様に思われた。幼児達の表情に、笑顔はあまりなく、むしろ極めて「真剣」であった。

学生と幼児の作品の違いは様々な要因があり簡単に比較することはできない。しかし、幼児は学生と比べると使える語彙が少なく、見るもの、感じるものすべてが新鮮で驚きをもっており、言葉＝イメージで連想されることによる記号的な言語による「見立て」が少なくなることは予想される。

「見立て」による造形活動に創造性がないわけではない。また具体的であることに問題があるわけでもない。ただし、それが記号的な言語による「見立て」であるとするれば、そこに創造性を見いだすのは難しいであろう。

5. おわりに

「見立て」は、言葉の発達や経験によるイメージの蓄積と関係がある。幼児にとって「対象物」の命名は言葉による世界の差異化であり、その意味分節作用が、内面外面の全存在世界を喚起する力を持つ。そして、「見立て」の言語化によって、他者への伝達や他者からの受容が可能となり、既知のイメージを「見立て」て、組み合わせることで、新しいイメージを作ることによる創造性が育まれると考えられる。このように言葉の発達による「見立て」の重要性は明らかである。

しかし、言葉が表層的で紋切り型、概念的なイメージ、すなわち記号化されたイメージのみで捉えられ、それからもたらされる言語的な「見立て」に終始するとすれば「新しい意味生成」としての創造行為を見出すことは出来ないであろう。

幼児にとって、五感を通して材料等と関わる中で喚起される「見立て」と「仕立て」との複合的な往還の過程で、新たに作り直されるイメージこそが、「新しい意味生成」としての創造行為であると考えられる。

「見立て」は、言葉の発達や経験によるイメージの蓄積と関係がある。しかし、そもそも、言葉とは何か、イメージとは何か、今後さらに検討していきたい。このことによって、幼児造形における創造過程とは何か、より明らかになるのではないかと考える。



図1 「変容-祭壇」, S100, 大賞受賞, 第34回西日本美術展, 石橋財団石橋美術館, 2001, 西日本新聞社作品収蔵



図2 「森Ⅱ」, F120, 第70回記念二紀展, 国立新美術館, 2016



図3 動物に変身 (新聞紙)



図4 ブランコ (チラシ)



図5 キャンプファイヤー(チラシ)



図6 公園 (木)



図7 人 (木)



図8 いもむし (小麦粉粘土)



図9 お弁当 (小麦粉粘土)



図10 いもむし (カラードテープ)



図11 女の子とりんご (カラードテープ)



図12 プリンセス (カラードテープ)



図13 ブランコ (保育士との共作)



図14 恐竜



図15

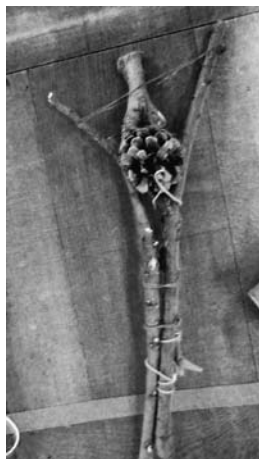


図16



図17



図18



図19



図20



図21



図22



図23



図24



図25



図26

引用文献

- 1) 杉山 明博・八木 朋美・杉山 理絵,「幼児教育における見立ての意義についての研究 -等価変換と汎用性の視点から-」, 常葉大学保育学部紀要, (2), p.25, 2015.
- 2) 鮫島 良一,「造形表現活動における『見立て』と『仕立て』の構造」, 日本美術教育研究論集, (49), pp. 42, 2016.
- 3) 第34回西日本美術展覧会カタログ, 西日本新聞社, p.24, 2001.
- 4) 重村 幹夫「現代における絵画表現の可能性についての一考察-制作者の立場から-」, 山口芸術短期大学研究紀要, (38), 山口芸術短期大学, pp.63-73, 2006.
- 5) 栗山 誠,「造形遊びにみられる幼児の探索活動の実際」, 大阪総合保育大学紀要, (3), pp.99-110, 2008.
花篤 實・辻 正宏編著,「0～4歳児の造形」, 三晃書房, P. 134, 1987. 鮫島 良一の前掲書, pp.41-52.
- 6) 今井 和子,「自我の育ちと探索活動」, ひとなる書房, pp.84-93, 1990.
- 7) 若山 育代,「幼児の見立て描画における言葉かけの研究」, 博士論文 (広島大学), pp.6-7, 2009.
- 8) 齋藤 亜矢,「ヒトはなぜ絵を描くのか」, 岩波書店, p.89, 2014.
- 9) 齋藤 亜矢の前掲書, pp.101-102.
- 10) 西野 範夫,「子どもたちがつくる学校と教育」, (3),『美育文化』, 財団法人 美育文化協会, pp.55-57,1996.
- 11) 西野 範夫の前掲書, (22), pp.56-59, 1998.
- 12) 西野 範夫の前掲書, (12), p.55, 1997.
- 13) 丸山圭三郎,「生命と過剰」, 河出書房新社, 1987.